

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『別れの儀式』における日常の記述についての考察
Author(s)	伊ヶ崎, 泰枝
Citation	フランス文学, 30 : 14 - 24
Issue Date	2015-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041125">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041125</a>
Right	
Relation	



## 『別れの儀式』における日常の記述についての考察

伊ヶ崎 泰枝

### はじめに

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『娘時代』(1958)に始まる一連の回想録は、1981年に刊行された『別れの儀式』を最終巻としている。『娘時代』の一人称「私」の語りは、続く巻『女ざかり』(1960)、『或る戦後』(1963)では、語り手と伴侶サルトルとから成る一人称複数「私たち」の語りへと変化する。『決算の時』(1972)では、それまでの年代順の構成にかわって、主題別の構成が採用されている。サルトルの死後に出版された最終巻『別れの儀式』では再び年代順の形式が採用され、1970年から1980年までの11年間のサルトルの晩年の記録が主体となっている。『娘時代』の最終部でサルトルを登場させて以降、彼の最も特権的な証人である立場から、ボーヴォワールは回想録の中で彼の思想の発展や著作の成立にかかわる背景を詳述している。後年のサルトル研究者にとって、ボーヴォワールの回想録は参照すべき必要不可欠な作品である。

ボーヴォワールは『別れの儀式』の序文の中で、この作品が十年間つけた日記に基づいていると述べている。著作、インタビュー、映画、デモへの参加、新聞の創刊といったサルトルの活動の記録の中に、確かに何の変哲もない日常生活の風景が織り込まれていることに気付く。例えばサルトルの通院と病状の記録、習慣にしている食事とアルコールの摂取、季節や休暇に関する言及が随所に散見される。回想録最終巻という特別な空間におけるこれらの日常生活の記述の役割について論じていきたい。

### 1. 回想録における食に関する記述

さて、日常の些細な出来事の記録とは回想録にとってどのような意味を持つのだろうか。1966年に、日本で行われた講演で、ボーヴォワールは小説について次のように説明している。

Un roman c'est une espèce de machine qu'on fabrique pour éclairer le sens de notre être dans le monde. Il y a donc un avantage évident du roman ; il permet de supprimer tout ce qu'il y a d'inutile dans le monde qui nous entoure, d'en abolir la pure facticité<sup>1)</sup>.

従って、不必要な要素が小説の中で排除される結果、小説の全ての要素は意味を

帯びていることになる。『招かれた女』(1943)の中で、作中人物ジェルベールが「僕はペルノー酒は嫌いだけど飲むのは好きなんです」と語っている場面がある<sup>2)</sup>。これは、階段を降りる速度を競う事と同様、彼の抱く何でもないことへの頑固なこだわりを表現している。また、スペイン風の酒場でグザヴィエールがジェルベールからもらった薔薇の花を挿したマンザニラ酒は、彼女が煙草を自分の掌に押し付けてフランソワーズを圧倒する決定的な夜の小道具として、作品にとって省略することのできない要素である。

これに対して、回想録の中で偶発事あるいは事実性を扱うことの意義を同講演の中で次のように述べている。

*J'étais agacée de n'arriver à faire voir le monde que d'une manière déformée, à travers des intrigues trop construites, des épisodes trop signifiants. Alors j'ai pensé qu'au lieu d'éliminer les contingences, la facticité, comme on fait dans le roman, il y avait une démarche inverse qui consistait à prendre appui sur la contingence, sur la facticité<sup>3)</sup>.*

『或る戦後』の序章にも、ありふれた日常の記録の重要性を次のように述べている。

*Non seulement c'est par eux [=les détails qu'on dit triviaux] qu'on sent une époque et une personne en chair et en os : mais, par leur non-signifiante, ils sont dans une histoire vraie la touche même de la vérité ; ils n'indiquent rien d'autre qu'eux-mêmes et la seule raison de les relever, c'est qu'ils se trouvaient là : elle suffit<sup>4)</sup>.*

それゆえ、同じ飲食の記述であっても、小説と回想録とでは異なる役割を果たしていることになる。実際に、ポーヴォワールの一連の回想録には、若い頃の旺盛な食欲や旅先の食事等が付随的な要素として描かれている。例えば『女ざかり』では、1931年の最初の赴任地マルセイユでの夕食が語られている。スペイン、イタリア、ギリシャ、モロッコ等の旅先での食事や自然の記録も織り込まれている。戦時に始まる物価の高騰と悪化する食糧事情について特に注意を促している部分もある<sup>5)</sup>。戦後の記述から始まり、政治活動にページを割く事が多くなった『或る戦後』以降の巻でも、旅先の食事がところどころ記載されている。

ところが、それまでの巻の旅先や戦時といった特別な状況の下にある食事の風景の描写に対して、『別れの儀式』では、平凡な日々におけるサルトルの通院と病状の記録、散歩、音楽鑑賞、昼食、夕食に好む食べ物が繰り返し語られる。とりわけ質素で決まりきった食事の内容や、アルコールの摂取についての言及が随所に見ら

れる。

Pendant ces concerts en chambre, nous mangions un œuf dur ou une tranche de jambon et nous buvions un peu de scotch. (CA, p.18)

Nous buvions du scotch et nous causions. Nous dînions d'un peu de saucisson ou d'une tablette de chocolat. Au déjeuner, en revanche, je l'emmenais dans de bons restaurants des environs. (CA, p.29)

Il prenait exactement ses remèdes, buvait un unique verre de vin blanc à déjeuner, de la bière à dîner, et ensuite deux whiskies sur la terrasse. Pas de café et du thé seulement au petit déjeuner (les autres années, il en avalait à cinq heures des décoctions extrêmement fortes). (CA, p.37)

先に述べたように、回想録にとって日常の出来事を描くことは、その存在そのものが作品に真実味を与える偶発的でとりとめのない事柄であるとはいえ、『別れの儀式』では平凡な細部にとりわけ焦点が繰り返し合わせられているのが目に付く。サルトルの執筆や政治活動の記録と、彼の日常生活の細部の記録との間に、真実の名においては何ら違いのない扱いとなっているのである。

## 2. 身体の反乱

さて、『別れの儀式』の中でサルトルの晩年の飲食が繰り返し言及されているが、若き日の彼の食べるという行為についての概念は大変特殊なものであったことに触れたい。

まず、『存在と無』(1943)において「食べる」という行為は、「埋められるべき無一穴」を塞ぎ満たすことに他ならない。

[...] une bonne partie de notre vie se passe à boucher les trous, à remplir les vides, à réaliser et à fonder symboliquement le plein. [...] Cette tendance est certainement une des plus fondamentales parmi celles qui servent de soubassement à l'acte de manger : la nourriture, c'est le « mastic » qui obturera la bouche ; manger, c'est, entre autres choses, se boucher<sup>6)</sup>.

実際の若き日のサルトルの食の傾向については、『奇妙な戦争—戦中日記』(1983)にその特徴的なものが示されている。

Il m'est tout à fait indifférent de sauter un repas de midi ou même les deux repas, de me nourrir de pain

ou au contraire de salade sans pain, ou de jeûner un ou deux jours. Je puis aussi rester une nuit ou deux sans dormir<sup>7)</sup>.

ミシェル・オンフレがこのようなサルトルの食に関する興味深い傾向について特筆している。

Les nécessités corporelles lui ont toujours inspiré dégoût et mépris. [...] Oublieux d'hygiène, il l'est aussi des rythmes du corps et de la nécessité de transcender la nécessité naturelle par les rituels culturels que sont les repas<sup>8)</sup>.

従って、若きサルトルの食との特殊な関係は、身体の欲求の軽視と関係があるように思われる。サルトルの1954年の高血圧と過労による入院と1958年の重大な健康上の問題は、『或る戦後』の語り手に死を予感させ、苦悩を引き起こす。とりわけ、1958年の『弁証法的理性批判』（1960）執筆時の多量のコリドラーヌ（興奮剤）の服用と過度の飲酒は、執筆のために健康の資本をぎりぎりまで使い果たす行為であり、彼の身体との関係を推し量るための重要な要素である。

しかし、これまで述べてきたような若き日、壮年期のサルトルの身体と飲食との関係は、『別れの儀式』では逆転している。この作品は食べる事、飲む事の記述に溢れているが、それは病人の食事である。

Je lui ai donné à déjeuner de la purée, de la brandade, de la compote de pommes. Le lendemain après-midi, le dentiste a posé le râtelier. (CA, p.55)

L'alcool, le café, le thé, il n'en buvait que ce qui lui était autorisé. Mais je me désolais de le voir engloutir tant de pâtes et surtout de glaces alors qu'il était prédiabétique. Et puis, à cause de sa prothèse dentaire, de la quasi-insensibilité de ses lèvres, de sa demi-cécité, il mangeait malproprement : le tour de sa bouche était sali de nourriture et j'avais peur de l'irriter en lui disant de la nettoyer. (CA, p.81)

サルトルにとって飲むこと、食べることが過去に比べて重要さを持つのは、知的活動が不調である彼の中に「一種の空白があった」（CA, p.132）からであると語り手によって説明されている。また、食事そのものが、最も語り手を心配させ、神経を使わせる事柄であった（CA, p.81）事情もうかがえる。

ところで、病人における食事の重要さについては、ポーヴォワールが、母親の最期の4週間と死を語った『おだやかな死』（1964）に同じような関心が見られる。

Puis je la faisais déjeuner : incapable de mâcher, elle mangeait des purées, des bouillies, des hachis très fins, des compotes, des crèmes ; elle s'obligeait à vider son assiette : « Je dois me nourrir. » Entre les repas, elle buvait à petites gorgées un mélange de jus de fruits frais : « Ce sont des vitamines. C'est bon pour moi »<sup>9)</sup>.

実際にはもはや回復の見込みがないにもかかわらず、病名を伏せられ、病人は周囲の嘘に勇気付けられる。食事が苦痛でありながらも栄養を摂ろうとする彼女の負担を語り手は軽減してやりたいと考えており、全部食べることを制したり、皿をそっと取り上げてしまったりする。飾り気のない乾いた筆致で病人との会話を記録し、食事の様子を描いている。ここでの語り手の関心は病人を保護することに他ならない。

Le monde s'était réduit aux dimensions de sa chambre : quand je traversais Paris en taxi, je n'y voyais plus qu'un décor où circulaient des figurants. Ma vraie vie se déroulait auprès d'elle et n'avait qu'un but : la protéger<sup>10)</sup>.

語り手は、『おだやかな死』の中で病人である母親の看病と、彼女の生きることへのひたむきさに対する共感を語り、母親の死の悲しみを読者と分かち合うことで乗り越えようとする。それと同時に、観察者としての視線はしばしば女性の肉体に向けられ、そのあからさまな描写は、女性の肉体と死についてのタブーを取り除く事を目指している<sup>11)</sup>。

同様に、サルトルの過度の飲酒に関しては、瓶を隠したり、水で薄めるなど、暴飲から彼を守ることに神経が配られている。

Le soir, chez moi, il ne s'est pas aperçu que Sylvie avait mis de l'eau dans la bouteille de whisky ; cette petite trahison m'était désagréable : mais je ne voyais pas d'autre moyen de diminuer sa ration d'alcool. (CA, p.71)

Il éprouvait de plus en plus souvent le besoin d'un verre d'alcool. [...] À la fin de chaque entretien, Sartre exigeait avec colère de boire un whisky. (CA, pp.146-147)

病人の保護という目的から、具体的な日常の記録が重要な意味を持つのは当然であろう。もはや著名な哲学者の特殊な飲食の傾向ではなく、万人と同じ身体に焦点が当てられている。ボーヴォワールは処女作に「Quand prime le spirituel」というタイ

トルをつけたが、ここでは肉体の優位に譲ることになる。「頭脳がまだしっかりしているのに、われわれを見放してしまうこの肉体とはおぞましいものだ」(CA, p.129)と語り手は感想をもらす。肉体の存在を包み隠さず語ることは、「老いと死」におけるタブーを取り払う行為であると言える。

### 3. 語りの変化とサルトルの晩年の思想をめぐる問題

具体的な日常の記録が重要な意味を持つことについて、病人の保護と身体の内存在という観点から論じてきた。次に、サルトルの晩年の病状とそれに伴う肉体を描写している語り手の位置に着目したい。というのも、『別れの儀式』においては、それ以前の巻の自己物語世界の物語言説から等質物語世界の物語言説へ、すなわち語り手「私」はもはや彼女の語る物語言説の主人公ではなく、サルトルを主人公とする物語へと移行しているからである<sup>12)</sup>。語り手は、サルトルの晩年の病状と日常を仔細に記録する観察者の位置へと後退している。

実際、語り手自身の活動についての記述は優先順位が低くなっている。例えば、オヴェルネの葬儀の日に歩行困難なサルトルに語り手が同行できなかった事実が語られ、注が付されている部分がある。

À cause d'une réunion de Choisir<sup>1</sup>, je n'ai pas pu l'accompagner à l'enterrement. Il s'y est rendu avec Michèle Vian. (CA, p.46)

注には語り手の側の事情が説明されている。

1. Groupe féministe dont j'étais codirectrice et où ma présence ce jour-là était indispensable. (CA, p.46)

すなわち、サルトルについて本文を語り続けるために、語り手が彼に付き添えなかった理由は本文から注へ移されていることがわかる。

また、ビアンカ・ランブラン、クローディーヌ・モンテーユの証言によれば、ボーヴォワール自身が晩年、拒食症やアルコール依存症を患っていたと推測されるが<sup>13)</sup>、このことに関して『別れの儀式』ではほとんど言及されていない。常にサルトルの日常生活と病状の記録に注意が向けられていることがわかる。

このような語りの中で、サルトルを主人公として一歩退いていた語り手が、それまでの巻の一人称複数「私たち」の語りと同様、はっきりと彼の意志を言い切っている部分も確かに見受けられる。

Elle [=Michèle] lui a dit, à quelques jours de là : « Je voulais t'aider à mourir dans la gaieté. Je croyais que c'était ce que tu souhaitais ! » Mais il ne désirait pas du tout mourir. (CA, p.140)

しかし、サルトルの考えを断言できている箇所は多くはなく、『別れの儀式』では、語り手は専ら彼の意志を推測したり解釈したりする。

Il s'est tout de suite rétabli mais je me suis demandé pourquoi, dès qu'il le pouvait, il abusait ainsi de l'alcool. « C'est agréable », me disait-il, mais cette réponse ne me suffisait pas. J'ai supposé que s'il se fuyait ainsi, c'est qu'il n'était pas content de son travail. (CA, p.53)

従って、サルトルの行動や言葉は語り手の観察によって記録されるが、それは、語り手個人の観点を通してに他ならない。語り手とサルトルの二人の間に横たわるこのような溝は、それ以前の巻には見られない要素である。サルトルは外から観察され、日常の些事が簡潔な文章で記される一方、語り手によって重要と判断された彼の言葉はありのままに記録され、その意味を語り手が補ったり説明したりする。

Je lui ai dit : « Aujourd'hui, vous allez chez l'oculiste. — Non, pas l'oculiste. — Mais si. — Non, je vais chez le médecin qui s'occupe de moi après le docteur B. — C'est l'oculiste. — Ah oui ? » Il a demandé si c'était B. qui lui prescrivait la pilocarpine. Il répugnait à consulter pour ses yeux, à penser à ses yeux. (CA, p.83)

このように実際の会話に近いものをそのまま再現<sup>14)</sup>することで、語りの速度は緩む。例えば、サルトルの記憶の混乱が数多く記録された1973年の章は、他の章に比べてもページ数が多くなっている。また、行動主義的« behaviouriste »ともいえる文体でサルトルの行動のみを描写している部分も見受けられる<sup>15)</sup>。

Il a souri d'une manière indéfinissable et il m'a dit : « Alors, c'est la cérémonie des adieux ! » Je lui ai touché l'épaule sans répondre. Le sourire, la phrase m'ont poursuivie longtemps. (CA, p.35)

従って、サルトルの病状と日常を事細かに記録することの重要性は、語り手が観察者としての位置へと後退している語りの変化からも導き出される。

サルトルの病状、すなわち知的活動の衰え、半失明状態、麻痺、歩行や排泄等の困難に関する症状をためらうことなく書き記したことに対し、出版直後より様々な評価や憶測を呼び、物議を醸した。サルトルの晩年を忌憚なく記録した事情につい



ては、彼の晩年の思想の変化も理由の一つとして挙げられよう。サルトルが自分の仕事の続きを託そうと望むピエール・ヴィクトール（本名ベニ・レヴィ）について、語り手はサルトルと意見を同じくしていない。ピエール・ヴィクトールとの1980年の対談『いま、希望とは』に表れた最晩年の思想は本来のサルトルのものではないというポーヴォワールの考え方が、些細なものを含めて彼の不調の記録をより詳細に書き進めさせたという推測も成り立つ<sup>16)</sup>。いずれにせよ、ダニエル・マドレナが指摘しているように、晩年のサルトルのイメージは語り手によって異なる、複数の統一のとれないものとなった。

Aux divines lucidités s'opposent les trop constatables relativités : les images de Sartre, écloses au lendemain de sa mort, se dissemblent ; sans doute, ces instantanés troublés par l'affectivité céderont la place à des travaux *in vitro* ; mais, en biographie, il n'est pas de futur où parallèles et divergences se rejoignent<sup>17)</sup>.

サルトルがその病状のために複数の人物から観察され、さらにポーヴォワールが特権的証人として彼のイメージを独占できなくなったことが原因と言えるだろう。回想録のそれまでの巻とは異なり、観察者としての位置から語り手によって記された日常の些事、会話、病状の詳細な記録には、サルトルの晩年の思想をめぐる問題が浮き彫りになっていることが指摘できる。

#### 4. 老いと死

ポーヴォワールは老いに関心を持ち続けた作家である。文学研究者と科学者の60代の夫婦を作中人物とする作品『控えめな年齢』（1967）で、夫アンドレがこの年齢において新たな発見が難しいことを語る場面がある<sup>18)</sup>。また、「*Malentendu à Moscou*」では、退職した教師ニコルと歴史家アンドレという同じく60代の夫婦が中心人物であるが、アンドレの飲酒に苛立ちながらも、酒の他に「私たちの年で何が残っているというのだ」とニコルが考える場面がある<sup>19)</sup>。エッセイ『老い』（1970）では、変化に抵抗し、それまでに身に付けた習慣の奴隷となり、好奇心を失っていく老人の傾向が指摘されている。つまり、日常の出来事の単調な記録の繰り返しは、語り手ポーヴォワールと伴侶サルトルが老いたこととも無関係ではあり得ない。

ポーヴォワールの回想録第一巻『娘時代』では、主人公の二十歳までの成長と自由の獲得が自己形成小説のように導き出されている<sup>20)</sup>。若いヒロインは世界を砂糖菓子のように食べる欲望を示す。信心深い思春期の頃の田舎の自然の描写は、彼女

の視線によって神の創造物が目覚める神秘に満ちている。神を信じなくなってからの、空虚さと孤独、死の宣告もまた、彼女の心の状態に基づいて大きく針のふれる叙情的な描写の一つである。

幼少期と思春期を描いた『娘時代』の到達点が「二十歳の主人公によって勝ち取られる自由」であるなら、『別れの儀式』における到達点とはすなわち「サルトルの死」である。最終巻である『別れの儀式』には、彼の死を帰結とした年代順の語りが見出される。1970年から1980年のサルトルの死までの11年間の記録は、一年一年の区切りを章立てとしており、必ずしもサルトルの晩年の生活・活動の実際の区切りとは一致していない。年ごとに形式的な区切りを採用しながら、彼の死に向けての限られた未来を表していった。その日常の些細な出来事の飾り気のない記述は、情感豊かな思春期を描いた『娘時代』の記述と対照をなしている。

ところで、これら全11章からなる11年のサルトルの活動と日常の出来事の記録の中に、毎年やってくる季節の喜び、花々、鳥の声といった自然の美しさが時折控えめに、しかし繰り返し描写されていることに気付く。

[...] le printemps était magnifique : une profusion d'arbres en fleur. Il faisait doux ; ça ressemblait à du bonheur. [...] Le jour suivant, le 21 mars, était encore éblouissant : « C'est le printemps ! » m'a dit Sartre gaiement. (CA, pp.67-68)

Il sentait la beauté de cet automne bleu et doré et il s'en réjouissait. (CA, p.130)

Je me rappelle ce matin où un brillant soleil d'hiver a envahi son bureau et baigné son visage : « Oh! le soleil », s'est-il écrié avec extase. (CA, p.164)

これらの瑞々しい季節の移り変わりについての飾り気のない簡潔な描写は、常にサルトルの死を予感し、そこへ向かって世界が落ち込んでいくような語り手の不安の中に、時折挿入されている。老いと死の不安の色濃い日常の習慣の語りの中に、幸福に似た淡いアクセントを与えている。クレール・ケロンは、ボーヴォワールの文体における「ピトレスクなものへの抵抗」を指摘している<sup>21)</sup>。『別れの儀式』は、文学の美しさの嘘を排除しながら、通俗の言葉によって万人と同じ老いの日常と死を描き出しており、簡潔さの中に感動を生み出している。

ボーヴォワールは『おだやかな死』の中で、「近い人の死を語ることは、自らの死の予行演習をしているに他ならない」と述べている<sup>22)</sup>。彼女は、『娘時代』に始まる回想録の最終巻をサルトルの死を描くことで終わらせた。文学の虚飾を排し

た文体で、万人と同じサルトルの晩年の日常生活の貴重さを淡々と記録することで、自らの老いと死を描いたと言える。

## 結論

本論では『別れの儀式』における日常の記録を、食と身体、観察者としての語り手の位置と晩年のサルトルの思想、老いという観点を通して取り上げ、その役割を考察した。ボーヴォワールは、親友ザザ、母親といった近い人の死を描き、その悲しみを読者と分かち合うことで喪の作業を行ってきた。回想録の最終巻である『別れの儀式』では、伴侶サルトルの晩年をありのままに描き、「老いと死」に纏わるタブーを取り払うことで自らの死を準備したと言えるだろう。また、『別れの儀式』の中の空間では、それまでの巻で語られていなかった人々が登場したり、偽名が用いられていた幾人かの人物の実名が明かされていたりする。自身の死後に出版されるであろう書簡、手帳、日記を見据えて、それまでの回想録の中に作ってきた空間を『別れの儀式』では少しずつ解体し、死後の出版物との橋渡しの空間を築いていることが分かる。このような空間における、通俗の言葉による日常の出来事の記述は、長年の伴侶の死を描き自らの死を直視した回想録最終巻にふさわしい文体によるものであると言えるだろう。

## 注

『別れの儀式』を以下のように略記する。

CA : Simone de BEAUVOIR, *La Cérémonie des adieux*, Gallimard, Folio, 1981.

1) Simone de BEAUVOIR, « Mon expérience d'écrivain », in Claude FRANCIS, Fernande GONTIER, *Les Écrits de Simone de Beauvoir*, Gallimard, 1979, p.443.

2) « Je n'aime pas le pernod, mais j'aime boire du pernod, dit Gerbert ». Simone de BEAUVOIR, *L'Invitée*, Gallimard, Folio, 1943, p.319.

3) Simone de BEAUVOIR, « Mon expérience d'écrivain », in Claude FRANCIS, Fernande GONTIER, *op. cit.*, p.449.

4) Simone de BEAUVOIR, *La Force des choses I*, Gallimard, Folio, 1963, p.9.

5) « Si je cite ces lignes c'est que, relisant les lettres reçues à cette époque, je remarque avec quel soin tous mes correspondants décrivaient leurs repas ; Olga même n'y manquait pas. Manger était un problème crucial ». Simone de BEAUVOIR, *La Force de l'âge*, Gallimard, Folio, 1960, p.631.

6) Jean-Paul SARTRE, *L'Être et le Néant*, Gallimard, « tel », 1943, p.660.

7) Jean-Paul SARTRE, *Carnets de la drôle de guerre Septembre 1939-Mars 1940*, Gallimard, 1995 (初版 1983), p.331.

8) Michel ONFRAY, *Le Ventre des philosophes, critique de la raison diététique*, Grasset, Livre de Poche, 1989, p.136.

9) Simone de BEAUVOIR, *Une mort très douce*, Gallimard, Folio, 1964, pp.102-103.

10) *Ibid.*, p.103.

11) ボーヴォワールは、母親の他、カミーユ (シモーヌ・ジョリヴェ)、リーズ (ナタリー・ソロキーヌ) といった幾人かの女性の晩年の身体の衰えを描くことに、回想録の中で多くのページを割いて

いることも言い添えておく。

12) Gérard GENETTE, *Figures III*, Seuil, coll. « Poétique », 1972, pp.251-259 (5. Voix - Personne) 参照。訳語はジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』、花輪光、和泉涼一訳、書肆風の薔薇、1985を参照した。以下同様。

13) Bianca LAMBLIN, *Mémoires d'une jeune fille dérangée*, Balland, 1993およびClaudine MONTEIL, *Simone de Beauvoir, le mouvement des femmes*, Montréal, Stanké, coll. « Parcours », 1995.

14) Gérard GENETTE, *op. cit.*, pp.189-203 (4. Mode - Récit de paroles) 参照。

15) Geneviève IDT, « La Cérémonie des adieux de Simone de Beauvoir : rite funéraire et défi littéraire », in *Revue des sciences humaines*, n° 192, 1983, p.18参照。

16) 西永良成『サルトルの晩年』、中公新書、1988年、pp.8-77 (第1章変貌したサルトル) 参照。

17) Daniel MADELÉNAT, *La Biographie*, P.U.F., 1984, p.82.

18) « À mon âge on a des habitudes d'esprit qui freinent l'invention ». Simone de BEAUVOIR, *L'âge de discrétion in La Femme rompue*, Gallimard, 1967, Folio, p.15.

19) « Mais que nous reste-t-il, à nos âges ? » Simone de BEAUVOIR, *Malentendu à Moscou*, Roman 20-50 juin 1992, n° 13, Presses de l'Université Charles-de-Gaulle Lille III, p.160.

20) Éliane LECARME-TABONE, *Mémoires d'une jeune fille rangée de Simone de Beauvoir*, Gallimard, coll. « Foliothèque », 2000, pp.57-68.

21) « la résistance au pittoresque ». Claire CAYRON, *La nature chez Simone de Beauvoir*, Gallimard, coll. « Les Essais », 1973, p.203.

22) « Nous assistions à la répétition générale de notre propre enterrement ». Simone de BEAUVOIR, *Une mort très douce*, *op. cit.*, p.143.